

不「平素の殿様にもお似合ひ遊ばしません事を仰せられます。假初にも那の奥方様を御離縁なごうは、嗟乎、何事で御座りませう。」

彌「よ紛下る熱涙は彼の皺面を蔽ふばかり。」

吳「何を貴様は那樣に泣くのか。」

不「はッ、手前は泣きますので御座ります。殿様が餘り非道な事を御意遊ばしますゆゑ、奥方様の御胸中をお察し申上げまして、はい、泣きました。如何致しました。」

吳「城伯は返す辭も無くて、不興氣に黙して了つた。不破漸は旋て容を正して、

不「殿様は御大病中の事で何も御存じでは被在られますまいが、唯今も申上げます通、殿様のお命をお助り遊しましたのは、奥方様の御看病のお蔭で御座ります。御發病の

六「日目に御着に成りまして、其場から御枕上に十五日間と申すものは、唯の一時間御寝なつた事も無く、夜晝の御看病で御座りました。小鞠野に御在の時分から御心配の絶間は無いので、誠に悲惨しいほどお痛れ遊ばしてお在の處を、此方へお越々々其の仕合で、又一層の御疲勞は目に見えて、近頃の那の御血色は宛で御病人の狀で御座ります、其が殿様の御目には入りませぬで御座りますか。若し那の奥方様がお在遊じませなんだら、殿様は今頃は此世に被在れるのでは御座りませぬ。」

吳「あゝ、もう可いわ、解つた。」

不「お了解に成りまして御座りますか。」

吳「解つた、解つた。あゝ、睡く成つて來た。」

不「然やうなれば御寝なりました。」

爲う事無しに殿は夜着を引被つて了つたのである。

(二十二)

其後蓄又は毎に夫と對食する事に成つたのであるが、度重なるほどに吳城も左に右顔色を解いて彼に接する迄に馴れた。病は益す快方に赴いて、今では藤を離れて椅子に掛り得るやうに成つたので、靈象府と澤毛野とは最早氣遣無ければ頻繁に見舞ふ必要も無いと謂ふのを名として、故と足を遠くする。始終附添ふのは、蓄又と不破瀬で、其も交代であるから、半日と一晚夫婦掛向で居る事も有る。外は雪風烈しく、狼の遠吠が聞ゆると云ふ物凄いな夜などは、影幽なる燈火の下に除念無く縫物をして居る蓄又の姿は、抑も如何なる感をも彼に與へたであらうか。吳城伯は縦し其人に親まぬまでも、尙ほ飽くまで憎まんとは爲得ぬのであつた。

彼の優しさと、可憐さと、麗しさは日一日と吳城の心を和ぐるのである。

身も氷るばかりの夜を獨り寐も遣らず、看護の爲に蕾又は室の隅に控へて居た。其の佗しげなる容と憂はしき面立とは例ならず吳城の情を動したので。

吳貴方、どうか繪達の事件に就いて話を爲て下さいませんか。

と彼も此時始めて語らしい語を懸けたので、蕾又は空谷の聲を聞くやうに覺えて、妙からず悦んだ。因で逐一其の物語を爲て、尙ほ繪達と己との關係から、小鞠野に於ける生活の様等まで洩らさず打明けたのである。吳城は之に因つて又蕾又はの真相の一面を伺ひ知るを得た、則ち彼の到底憎むべきものではないと云ふ事を教へられたので。

是から五日ほど経て、吳城伯は少しづつ散歩も出来るやうに成つたので、天氣の好い、暖い日、解け初むる雪を踏んで、兩箇の友を其の小屋に訪ねたが、以前のやうには楽しく感ぜられなかつたので、更に歩を移して蕾又はの小屋に向つた。彼も有繋に長々の看護に倦れて、少く健康を害したので、此二日ばかり引籠つて休養して居るのであつた。

然るに思ひも寄らず殿の入來るのを見るより、蕾又はは慌忙しく寢臺を下りて、先づ感慙に迎へて、外出の克ふまでの輕快を祝した。吳城伯は身の上に係つた話を爲やう／＼と尋むるのに、蕾又はは毎に避けて、専ら然あらぬ事のみを話柄と爲るのであつた。

吳「もう近い内に我々は此を引拂ひたいものですな。」
蕾「然やうで御座います、貴方の御全快遊ばしますのをお待ち。」

ち申して居りまするので御座いますから、然やうなお鹽梅なれば、徐々支度を致しましても宜いかと存じます。」

吳「時に貴方は御體が悪いやうですが、甚麼具合ですか。」

曹「はい、難有う存じます。別に然したる事は御座いませんのですから。」

吳「然し、お顔色は良くありませんね。」

曹「然やうで御座いますか。」

熱と眼めらるゝのが面蓋さに、彼は思はず手を舉げて顔を撫でた。時に其指に晃いたのは吳城の贈つた結婚の指環である。其が目に入ると齊しく彼は忽ち不穩の色を作して、

姑く黙したのである。

吳「貴方は今度彼方へお還りに成つた上は、何云ふ御考で在のですか、伺つて置きたいので御座います。」

恁く有らんとは、蓄又も夙て期したる事ながら、其場に落んで見れば、決して心持は好くなかつた。けれども、彼は露ばかりも未練の色を見せずして、

曹「私は還りましたらば、田舎へ引込みまして一生を送りませうと存じて居ります。」

吳「城は此の意外の答を得て陰に驚いた體で、

吳「田舎で一生お暮しなさる？」

曹「然やうで御座います。」

曹「殿は俯いて何と無く考へて居る。」

曹「其等の事に就きまして、實は篇とお話を申上げませうと存じて居りましたので御座います。御病中の事ゆゑ故と今日迄差扣へて居りました。幸ひお話の次手で御座いますから申上げて置きますが、吳城家の御財産は悉皆お調べ申

しまして、明細に一一記して置きました御座いますから、
どうぞ之を御覽ありばしまして。」
持ち來つた計算表を其へ差置いた。

吳「是は何ですか。」

菅「貴方の御財産のお書付で御座います。」

吳「私の財産？私には那樣物は有りませんよ。」

菅「然やうなれば貴方のお有なさいませんか存じません、
然し、私が吳城家の物として保管致して居りましたので御
座います、私が田舎へ引込みました後は、貴方が
御監督遊ばしませんでは成りませんので御座いますから、
此の御書付はお手許へお置き遊ばしまして。」

吳「いや、それは猶且お心得違でせう。吳城家の財産と云ふ
ものは、既に貴方に所有権が有るのですから、其の書付を

他人の私が規ひ見るべきでないのです。又其を私に規ひ見
るのは違勅の罪に當ります。」

彼は其物に手さへ觸れぬのである。違勅の一言には菅又も
差當つて返す辭は無かつた。

菅「もう一件申上げたい事は……。」

吳「何ですか。」

見ると、菅又はいつか俯目に成つて、得も謂はれぬ胸の思
を委るゝ風情であつたが、其のまゝ餘は言はずして、彼の
結納の指環を抽取つて吳城伯の前に差出したのである。彼
は唯菅又の顔と指環とを送交に打眺めて、有間は互に無言
であつた。

菅「其は貴方へ御返納いたしますので御座います、どうぞお收
め下さいまし。」

吳「之を私へお還付に成ると有仰るか。」

管「はい。」

吳「何云ふお意で？」

其時管又は極めて冷々に、極めて寂しく、將た極めて備げに片頬の笑を洩した。

管「申上げます迄も御座いません。私よりは善く貴方が御存で被在います。」

吳「……………」

彼は先の財産の還附を言下に却けたるやうに深く之を却けぬのであつた。然のみならず、其よりは是の端よ遠動たるべきを、全く曉らざる如く持成して過した。

姑く有つて彼は我指なる指環に手を掛けた。

吳城伯は此際己の身を思へば大に得意でもあり、又管又の

切なる心を酌めば惘然の至でもあり、左右は彼の爲に悪からぬやう、今後の處置は恚して那して、と途上考へながら、日の暮方に小屋に歸つたのである。

燈を點して程も無く澤毛野子爵が訪ねて來た。椅子に着くと、ラムプの下に指環の置いて在るを見付けて、

澤「是は何爲たんじやね。」

吳「奈何も爲んのさ。僕と夫人との關繫が絶れた證なのだ。」

澤毛野子は目に稜立てて彼の顔を視ながら、

澤「ふむ、それぢや是は夫人の指環か。貴様が夫人の手から奪うたのか。」

吳「何、僕が奪ふものか、他から返したのだ。」

澤「うれで貴様は受取つたのか。」

吳「受取つたから此に在るのだ。」

澤「今になつて那の夫人を離婚するのよか。」
吳「今になつて、と云ふ事が有るものか、始から僕は心を許しては居らんのだやないか。唯今日公然と證の物を取戻した丈の事だ。」

彼の語氣は殆ど敵愾を脱すると一般に此事を軽く思つて居るのであつた。澤毛野は呆れ果てゝ頓に出づる言も無く、テエブルの端に兩臂を載せて沈吟して居たが、旋て太息を洩いて、

澤「嗟乎、無情な者じやのう！ 那程の夫人を貴様は何故に棄つるのじや。豕に眞珠を投ずる謂を免れんぞ。」

忽ち色を作したる吳城は、

吳「何、豕とは誰の事か。」

澤「誰の事か、うりや知らん。但然云ふ豕が有るじや。己に

與へられた物が過分である爲に、却つて其の直打が解らん奴を豕と云ふ。豕には眞珠をどより芋の尻の方が相當なのじや。唯憐むべきは豕の前に投げられた其の眞珠じやのう。」

吳「あゝ、君は其の眞珠が欲しいと見えるな。」

澤「何じやと！」

吳「欲くは遣らうよ、いつでも持つて行き給へ。」

澤「欲しいと僕が何時言うた。」

吳「言つても言はんでも、己の親友を毛族に比して、一方を眞珠に喩へるほどの女ならば、君は執心なのに違ないさ。」

口では欲しいと言はんでも、欲しいと思つて居るのだらう。」

澤「其通の没分曉漢ぢやから、貴様は豕じやと言ふのじや。

僕は夫人に執心も爲んけりや、決して欲しいとも思はん、唯

……貴様、能う聴け、那云ふ婦人と結婚する名譽を有ち

……貴様、能う聴け、那云ふ婦人と結婚する名譽を有ち

たいと云ふのじや。若し僕が其の真珠を獲らるゝ権利が有りや、身を棄てゝも必ず手に入るゝ、それほど貴く僕は思ふて居るのじや。」

菅又が彼の口に藉つて揚らるゝほど吳城は物々の不平を然じ得ぬのである。

吳善し、僕は豕なら豕でも可い、豕で満足して居るから君等は一切管つてくれ給ふな。」

淫然うでないから、貴様もう一過能う考へ直して見い。のう、是は獨り貴様の爲、又吳城家の爲のみならず、同族の爲に冀ふのじや。」

吳君も實に解らんを。始が那云ふ評の關繫の女ぢやないか、其を如何な事にも堂々たる伯爵夫人として、僕が公然と手把つて世間へ出られると思ふのか。」

淫那云ふ關繫であるからとは、何の口で言ふのか。畢竟那云ふ……。」

吳もう可い！
と言ふなり彼は座を起つて、佛然と室を出て了つた。

當又は指環を返して後は、助めて其人に面を合せぬやうに爲るのであつたが、吳城伯は其以來俄に不敏が増して、此方からは助めて會はうと爲る。因で日毎に行つて訪ぬるのであるが、然して會つて見れば、思ふやうに話を爲るのではない。それで又難面く遇ふのかと謂へば、決して然うではないので、堅い裏に優しい處が有り、可憐い裏に婉しらしい處が有つて、なかく棄て難く思はるゝのである。向來段々と世話に成り、苦勞を爲せた擧句否應言せず離婚まで爲て見れば、一生忘れじの憎悪も怨恨も痕無く消え去つて、彼は今當又に對して何等の介然たる者もあらぬ。始めて雲を排いて月を看たる吳城伯は、月の麗しさを識つたので、

憎む可く、嫌ふ可き當又は、敬す可く、愛す可き當又の誤解なるを漸く曉るのであつた。靈象府は或日彼に戯るゝこともなく、
 吾君は近來當又嫌に對する様子が大分變つたではないか、何云ふのかな。
 吳變つたとは奈何變つたのか。
 吾愛すべく變つたのじや。
 吳那樣事が有るものか。
 吾有つても差支無い所ではない、然う無けりや成らんのかや。
 吳奈何か知らんが、那樣事は無い。
 彼は飽くまで覺の無い體を装つて、強て言はゞ氣色を損じさうなので、靈象府も其場は口を噤んで了つたが、陰に澤

毛野と語合つて、此の結局を見る事を楽しんで居た。
 羽吳城伯も今は全瘉して、平生の健康に復し、猶又舊又の
 注意に因つて發送せられた旅費も着したので、いよく出
 發の一段と成つた。はや翌の朝ころは、配所の雪に埋れし
 身も花の都に還るよと思ふものゝ、有繁に住馴れし地を棄
 つる名残も惜まれて、彼の三人は其處此處と馬車を驅つて
 近邊を逍遙したのである。
 此日彼等の胸中に漾へたる愉快は誠に言語道斷であつた。
 靈象府伯は吳城伯を顧みて、
 「今日特別に景色が好いやうぢやが、彼得堡ぢや到底禁
 云ふのは見られんの。」
 吳長い間見たから可いだらう。」
 澤「けれども、住めば、のう、此處でも都じや、左に右棄つ

るに忍びんやうな感があるではないか。」
 澤「有る、有る。いよく都へ還へると成つて見れば、昔の
 事は夢よ、仇も恨も何も無い、嗚呼好い心持！」
 澤「其通り、靈象府先生の言の如しじや。」
 澤「吳城伯閣下は如何ですか。」
 吳「或は那樣ものかも知れんね。」
 澤「或はか？」
 吳「或はよ！」
 澤「或はよ！面白いのう。」
 澤「成程或はよ大いに面白い。」
 吳「何とでも言ふが可いさ。」
 澤「あゝ、それなら言ふが、翌の今頃君は舊又嬢と相乗で、
 此の美しき風景を眺めつゝ行くのじやぞ。」

「知らん、知らん！」
 と吳城伯は乍ち苦り切つて外の方へ目を反せて了ふ。澤毛野はパイプを垂れるやうに啣へたまふで笑を含んで居た。其顔を見て靈象府も同じく笑を含んだのである。馭者は速に鞭を鳴した。

(大團圓)

日數積りて一行の馬車は既にウラル山を踰えて、日一日と歐羅巴露西亞に近きつゝ、二三日の内には彼得堡に着くのである。

吳城伯は或朝早く目覺めて見ると、蓄又は頗る打勞れたと覺しく、車の動搖の激しき中に晏然として酣睡して居る。此方に向けたる寐顔に何氣無く目を留めると、涙を垂れし兩行の痕が歴々と頬の上に残つて居る。道は必ず前夜泣明したのであらうと思へば、然らぬだに今は既に蓄父が優しき胸を曉り得たる身には、争で之を見て目も昏れ、心も消ゆるやうに覺えざらんや、彼は我を忘れて夫人の顔を打目成りつゝ、街と擦寄つて其手を握つた。蓄父は乍ち驚き覺

めて身を起こさうと爲ると、殿が吾手を把つて居るので、益
す駭いて、然り氣無く引放したのである。吳城も其の唐突
を懸ちて頼に辭も出し得ぬ、當又は猶更口を開きかねて、
手持無沙汰に窓の外を眺めた。

吳もう程無く旅行も終りますよ。」

當又は纒に頷くのみであつた。

吳どうも此度は一方ならんお世話に成りまして、お禮の申
上げやうも無いのです。貴方は然り私の無情なのをお怒み
でありませうが、うりや追而お詫の爲やうも有らうと考へ
て居ます。」

依へかねたやうに當又は遠に答へた。

當いふえ、取だ事を有仰います。私は決してお怒み申すな
ど云ふ事は御座いませんので、然やうな御心配は

御無用に遊ばしまして。却つて私より心にも無く針ほどの
事を棒に致して、御名譽を傷けましたのみならず、那云ふ
憂き目をお見せ申しましたのは、皆私の不束から爲しまし
た業で、今と成りましては何と申上げて宜いのやら、どう
ぞ御勘辨遊ばして下さいまし。」

彼が餘なる可憐さに吳城は胸逼りて不覺涙を催した。

吳あゝ、恐入りました！今まで匿して居つた罪を白状しま

す。嘗て酒興の上で貴方を苦めたのは私です！」

當そんなら貴方が？」

吳赦して下さい！」

彼は情極つて再び當又の手を取つた。

本意ならぬ契を籠めしは、靈象府にあらず、澤毛野にあら
ずとは、已に業に當又も推し得て居たのである。然りなが

ら。的然其の人の口頭より出づるを聴きては、更に更に測ふべからざる感に打れて、憎きか、悲きか、可怨じきか、可耻きか、將又口惜きか、嬉じきか、心は忽ち異しく亂るまゝに、岸破と其處に打伏して了つた。

此の利形に吳城の心機は一轉したり。彼は忙々しく時計の鎌子を搜つて、其に附けたる舊又の返せし指環を放ち去つて、片手に女を抱き起せば、今更何を爲るらん、と身を振解くを、男の力にくつと引寄せ、有無を言はず彼の環を其指に穿した。舊又は呆れ感ひて直に抜取らんとするを、緊と抑へて、

「どうぞ其は改めてお受け下さい、どうぞ、どうぞ。私が前非を悔い、罪を謝し、而して貴方へ恩を返す其が體であります。私は最愛の妻として一生貴方を棄てません。貴方

も一生私を忘れずに……………」

舊又は涙に咽んで言ふ所を知らぬのである。馬は忽ち足掻を退めて駐車場に着いた。靈象府と澤毛野とは聲々に外方より呼はる、

「さあ、下りんか。」
「食事じゃ、食事じゃ。」

5/8/34

明治三十四年二月三日印刷
明治三十四年二月六日發行



著者
發行者
印刷者
發行所
印刷所

寒牡丹

實價金八拾錢

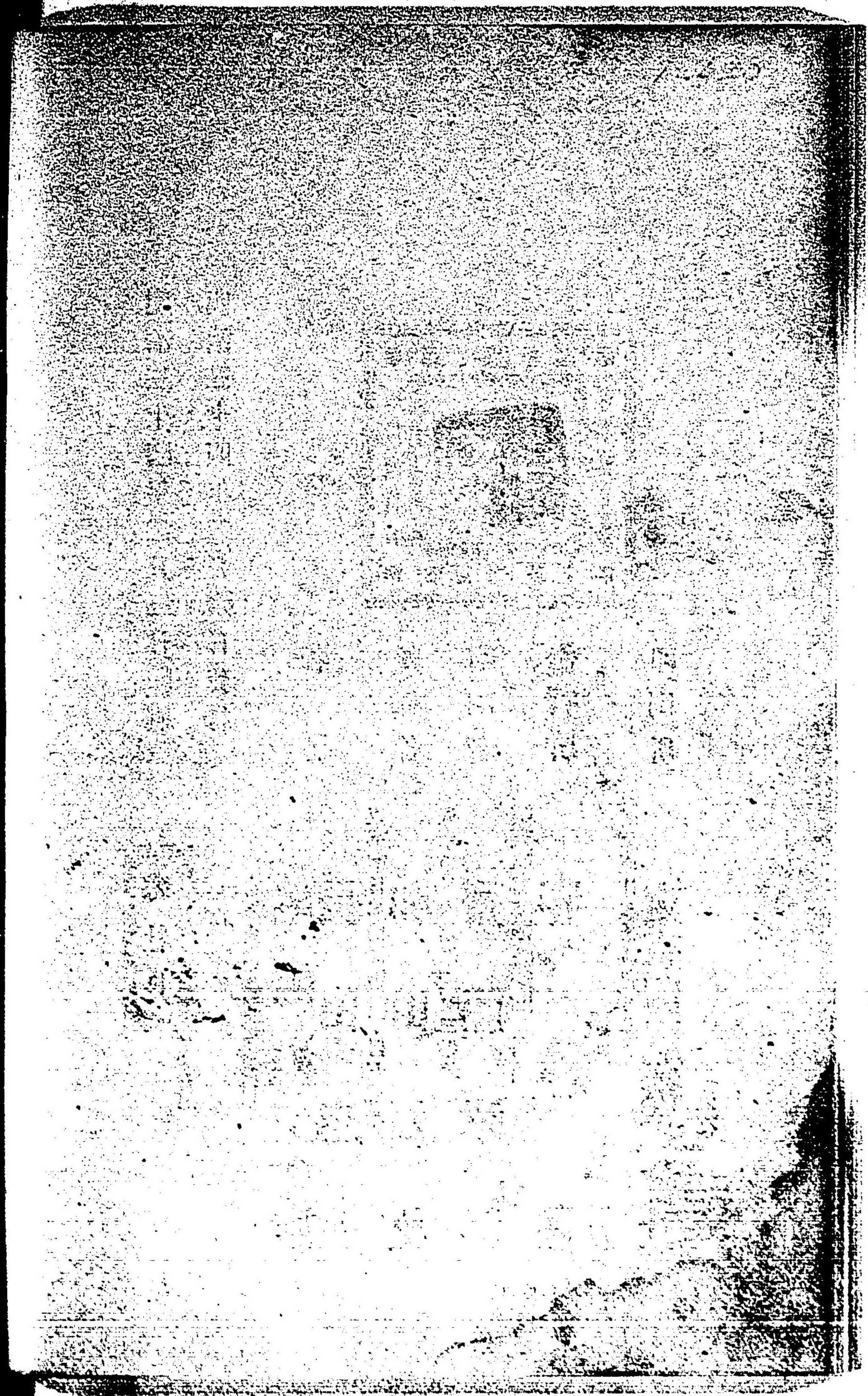
尾崎 德太郎

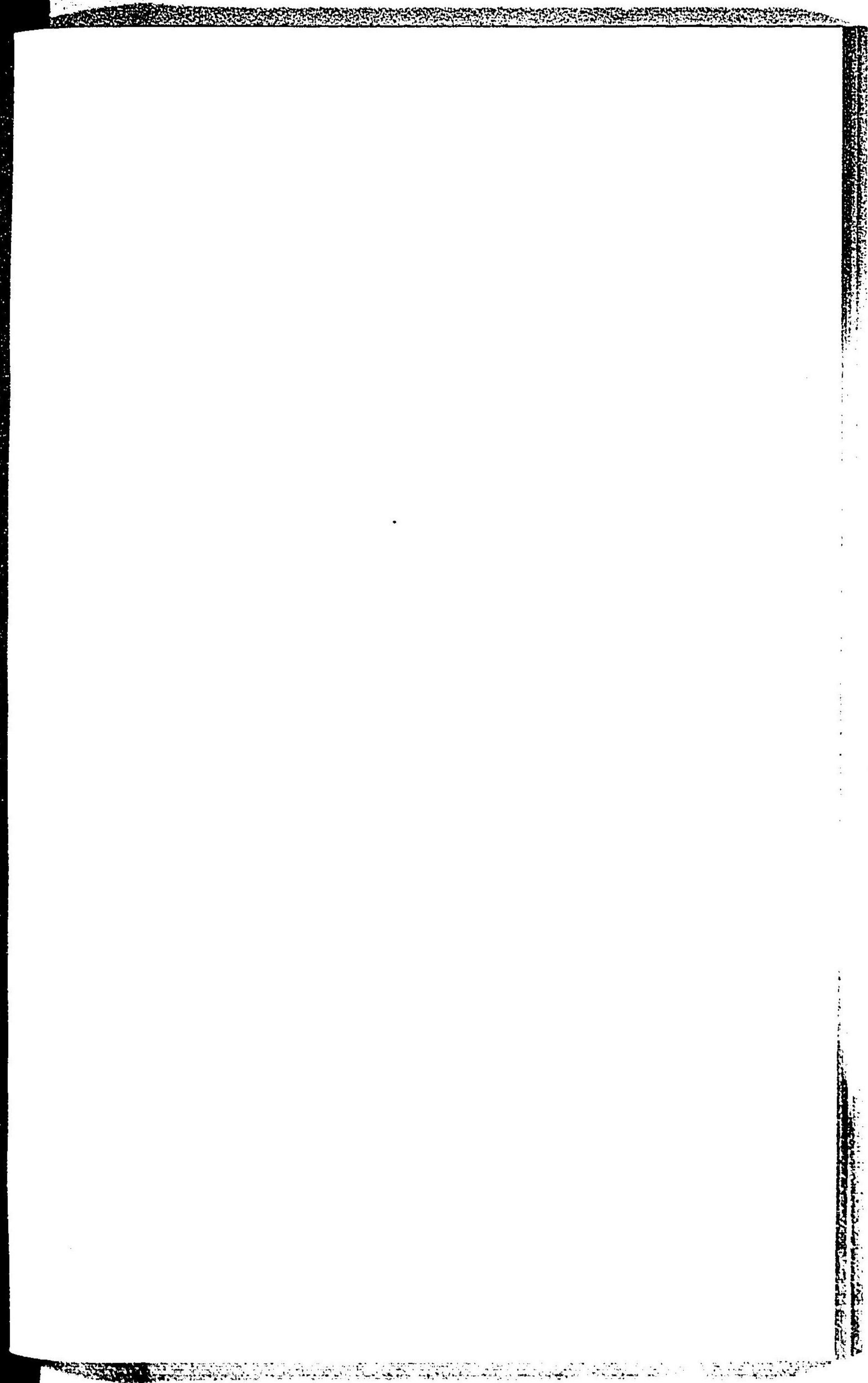
和田 心一

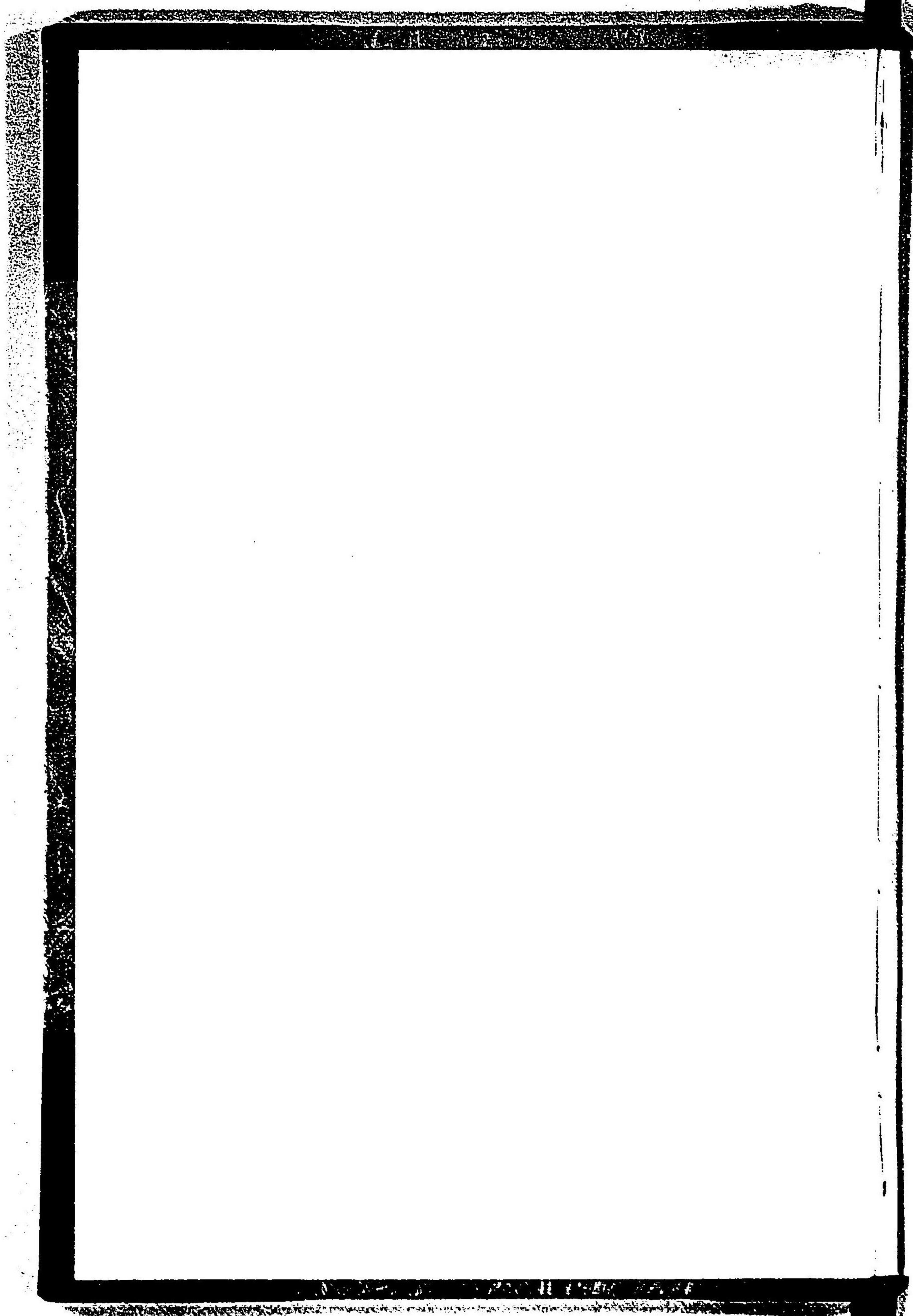
齋藤 章達

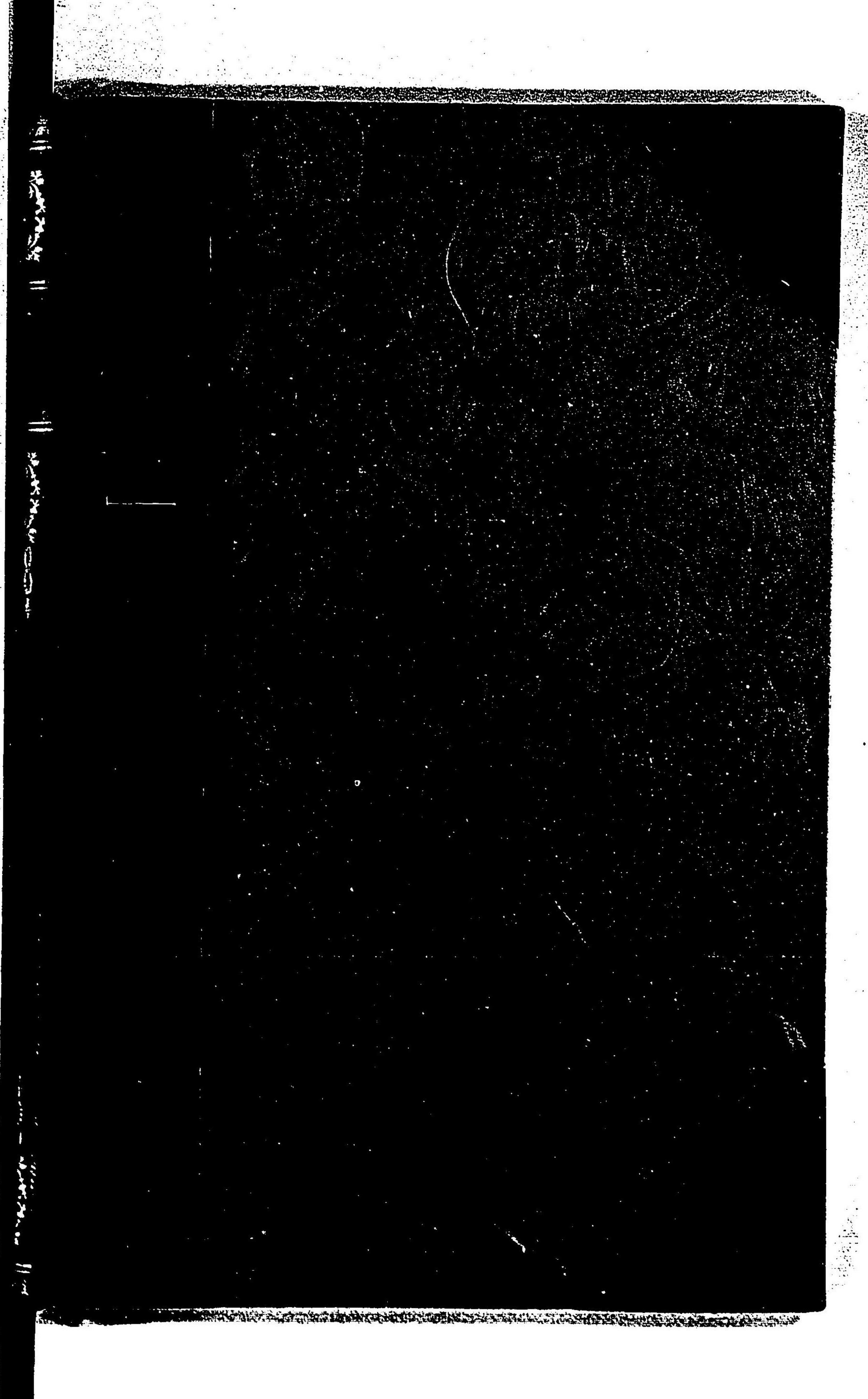
春陽 堂

東京市日本橋區兜町二番地
東京市日本橋區通四丁目五番地
東京市日本橋區通四丁目角
電話本局五十一番
東京印刷株式會社
(浪花) 三三五









90
48

093381-000-4

90-48

寒牡丹

長田 秋濤

尾崎 紅葉 / 著

M34

DBQ-0746



